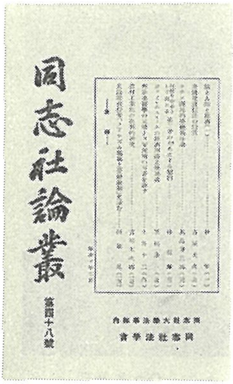
松井七郎名誉教授に聞く

激動期の同志社

—苦難に充ちた昭和十年代—

聞き手　河野仁昭



クリスチャン・ホームの子として

——先生は、新島先生とおなじ群馬県のご出身だとうかがっておりますが。

松井　群馬県の富岡という所で、明治二十九年に生まれました。富岡というのは高崎市からちょっと西南へ入った町で、安中にも近いのです。安中はご承知のように、明治七年に新島先生が帰国されて最初に伝道された町です。

新島先生は官界に出るだろうと思って、人人がたくさん押しかけてきた。ところがキリスト教の伝道にしか関心を示されないものだから、最後に残ったのは、湯浅治郎ら五、六名のキリスト教を熱心に聞こうという人たちだけでした。その湯浅が中心になって聖書の研究を始めたのです。

——それが安中教会の母体に？

松井　京都に同志社英学校を創った新島先生に、伝道者を送ってほしいと頼んだのです。それで、当時は同志社の学生であった海老名弾正が、明治十年に夏期伝道にやってきた。するとかなり多数の求道者が集まり、彼等の強い要望に応えて、翌十一年にも再び伝道にきたところ、多数の受洗希望者が出て参りましたので、京都から新島先生を呼び、明治十一年三月三十一日に男子十六名、女子十四名が新島先生から洗礼を受け、この三十名が直ちに安中教会を組織したわけです。

——初代の牧師は海老名弾正ですね。

松井　明治十二年六月に同志社を卒業された海老名先生が、牧師に招聘されたのです。先生は伝道に熱心でしてね、安中教会のみでなく、現在の富岡、原市、松井田の四教会を、一人で歩いて伝道された。当時は乗物などなかったですからね。

私の父は十六年に、母は十七年に、それぞれ海老名先生から洗礼を受けたのです。父の弟夫婦、姉、それから母も、十八、九年ごろ次々に洗礼を受けまして、一家が全部クリスチャンになったわけです。そういう家庭環境に私は生まれたのです。

柏木義円について

——柏木義円が牧師に就任するのはいつごろですか。

松井　明治三十年です。それから四十年ちかく牧師をされておった。先生の牧師時代に

私は育ったわけで、非常に大きな影響を受けました。私の家から安中教会まで二里ぐらいあるのですが、毎日曜日に通いましてね、明治四十年三月十日に先生から洗礼を受けました。先生は農閑期の木曜日の夜、私の家へ来て集会をして下さったのですが、そういう関係から先生に親しくしていただくようになり、先生の偉大な思想的信仰的感化を受け、先生の母校である同志社に憧れまして、中学校を卒業して同志社大学へ入学したのです。

――どういう方だったのですか。

松井　群馬県の人たちは、先生に「孔子様」というニック・ネームをつけていましたが、兎に角まじめな温厚な方なんです。子供さんがたくさんなのに、教会からは僅かしか給料を差し上げていないのでよく生活できたものだと思うのです。父はよく野菜や、年末に餅をつくとそれを差し上げるために、私が先生のお宅へ使いにお伺いし、先生と親しくお話しすることも度々ありました。

松井七郎名誉教授

――柏木さんは新島伝を書くつもりで、その準備をしておられたそうですね。

松井　それは徳富蘇峰がすすめたのです。人々は蘇峰に書くようにすすめておった。ところが蘇峰は、「新島先生のいちばん偉いところは宗教的な面だ。しかし、信仰のない私にはそれを書く資格がない、柏木君が適任だ、自分が持っている書簡その他の新島先生に関する資料は全部差しあげるから、柏木君ぜひ書いてくれ」といわれたのです。それで柏木先生は牧師を辞めて、新島伝の執筆に専念することになったわけです。

――何年ごろですか。

松井　昭和十二、三年ごろでしたな。創刊以来ご自身でやってこられた『上毛教界月報』と併行して、新島伝を書こうと決心されたのです。ところが満州事変以来、思想統制が厳しくなってきて、『教界月報』に載せた論説が問題になって、発行禁止が続きまして、そのために柏木先生はがっくりされて、『教界月報』をついに廃刊にされた。そういうことがあって、伝記のほうも進まないうちに、先生は昭和十三年に亡くなってしまわれたのです。

――『教界月報』には新島についてしばしば書いていますね。新島先生から直接学ばれた方だけに、教えられるところが多いです。

松井　新島先生の最も重要な点は「自由教育、自治教会」ということだと、柏木先生はみておられたのです。柏木先生が同志社を卒業してすぐに、一致教会と組合教会の合同問題が起こりますが（明治十九～二十二年）、海老名、小崎両先生をはじめ同志社のほとんどの先輩は、合同賛成論者だったのです。

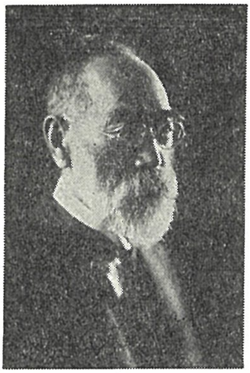
そのころ、新島先生から柏木先生に英文の手紙が参りまして「話したいことがあるので家へ来てほしい、医者から面会をとめられているので、人に知られないように」と書いてあった。柏木先生が行きますと、新島先生は「もし合同が実現するようなら、自分は同志社を捨てて北海道へでも行きたい。それほどこの問題には反対だ、君も反対してくれ」と頼まれたらしいのです。柏木先生が『同志社五十年史』に書いておられるのは、そのこと

なんですね。だから、もし柏木先生の新島伝が完成していたら、「自由教育、自治教会、両者併行、邦家万歳」という点に中心をおいたものになっていただろうと思います。

——伝記が完成しなかったのは残念ですね。

松井　私もアメリカから帰りましたとき、新島先生はアーモスト大学のシーリー教授から大きな影響を受けているようだから、シーリー教授について調べてほしいと柏木先生に頼まれたのです。そのころはまだ、私はアーモストとの関係もなく、ご依頼に十分なおこたえができなくて、申しわけなかったと思っています。

大正期の同志社



海老名弾正

——同志社へのご入学は何年ですか。

松井　大正四年で、同志社創立四十周年の年に、政治経済部の経済科に入りました。大正五年に旧制大学の第一回卒業生が出まして、私は大正八年卒業ですから第四回でした。

——その頃の同志社には、寮生がたくさんいたようですが。

松井　明治期の面影や学風が濃厚に残っておりました。寮もたくさんありまして、東寮には三寮、四寮、七寮、六寮の四棟……。

——今のアーモスト館の周辺ですね。

松井　そう。それから西寮がやはり大学の寮で、中学の寮は北寮といって、いまの大学会館の所に五寮と前寮、後寮の三棟がありました。

学生数は女学校まで合せて二千人ぐらいでした。同志社では創立以来、英語の教科書を使っていたのですが、私たちの時代でも、経済原論、西洋史、地理、商業史などは英語の教科書でして、それを習ったのである程度英語の力がついたと思っています。

——水崎基一先生から新島伝を学ばれましたか。

松井　習いました。水崎先生は私の崇拝する先生で、特に予科の倫理の時間の新島伝の授業からは、大きな感化を受けました。同志社への愛校心が育ったのはそのためだと言っても過言ではないでしょう。

——テキストはあったんですか。

松井　ご自分で英語で書かれて、それをガリ版刷りにしたのを毎時間配って、それにもとづいてお話をされるのです。非常にインプレッシヴな講義でした。

——水崎先生は原田助社長と意見があわなくなって、同志社を辞めましたが……。

松井　後にいうところの原田騒動ですが、事の起りは、水崎基一、日野真澄、波多野培根といった新島先生直門の人たちが、「原田社長は外へ出かけることが多すぎる、もっと学内におって、新島先生が目指された同志社教育をやるように心がけてもらいたい」と要求したのです。原田社長は講演や伝道で学校を留守にすることが多かった。それからいろいろ論議があって、原田社長は辞表を出されたのですが、大正七年一月の理事会で留任していただくことに決った。それでいま言った重要な先生方が、原田社長に辞職願を出して同志社を去られたのです。

柏木義円

ところがその後、日野真澄先生のお宅に失火事件——これは放火ですけれども——が起こるなどで、原田擁護派とその反対派の分裂と対立がますます激しくなり、ついに収拾がつかなくなったのです。

——日野先生のお宅の火事は、やはり放火でしょうか。

松井　放火だったんですね。京都風の格子戸が締っておったので、その格子戸の下で子供さんが四人か五人か焼け死んだのです。一般の同情がそこへ集まりまして、原田社長も責任を感じて辞められた。社長が辞表を出して同志社を去ったものだから、原田擁護の人たちも辞めてしまった。両派の重要な方々が、あの騒動で全部同志社を去ったので、同志社には大きな損失でした。

——経済学の滝本誠一教授とか。

松井　あの方は原田擁護派の筆頭でしたからね。原田先生はハワイ大学へ行き、滝本先生は慶応へ移りました。

アメリカ留学

——同志社を卒業されてすぐアメリカへ留学されたんですか。

松井　そうです、大正八年九月に。カリフォルニア大学のバークレイ校へ入りました。

——東部へ行きたいとは思われなかったですか。

松井　大部分の人は東部へ行くし、私も迷ったのですが、当時カリフォルニアは、同志社の先輩の内田堯という人——三井物産に長く勤務していた——がいて、卒業生の世話をよくしてくれていた。また、私の郷里の先輩で、やはり同志社出身の佐々倉七郎——横浜正金銀行（現在の東京銀行）に勤務していた——という人などがいまして、「アルバイトをしながら勉強するならカリフォルニアがいい、そういう仕事をえる機会も多いし気候もいい」と勧めて下さったものですから、バークレイに決めたのです。その頃はまだ小さい大学でした。

——日本人が多かったんじゃないですか。

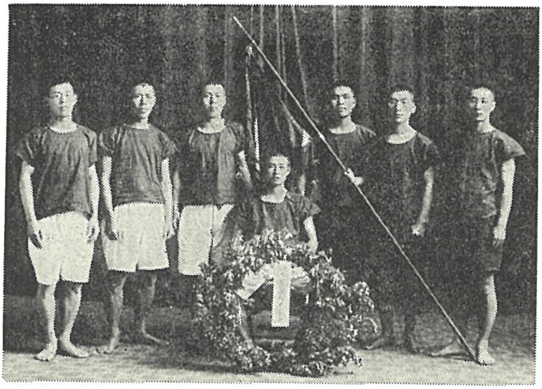
松井　多かったですね、バークレイにも五、六十人の日本人学生がいた。といっても、彼らはほとんど日系二世なんで、英語には困らない。東部のコロンビア大学などでは日本人だと多少同情的な待遇をしてくれたようだけど、カリフォルニア州では全然そういうことはなかったですね。

日本人の移民は、自分たちが移民になったのは学歴がなかったからであるので、子供の教育には熱心だった。ところが大学を卒業しても、排日感情がつよいものだから、現地では会社や銀行に採用してもらえない。日本の商社でも、英語ができるだけで日本の事情を知らないのでは困るといって採用しない。だから、早稲田大学などへ留学してから現地へ帰って働く、そういう状態で、それでも就職がむつかしいものだから、マーケットで野菜売りをしているような人もいました。

——すると、現在のように自由に住んで働けるのは、第二次世界大戦後ですか。

松井　そう、第二次大戦中に強制収容されていたキャンプを出てからですね。いまは民

間企業だけでなく、教員にでも政府の役人にでもなれるのだから、幸いだと思うのです。
働く場所にしても、戦後はカリフォルニア州だけでなくシカゴだとか東部まで広がって、日本人がアメリカ全土に分散しました。戦前はシカゴあたりでも日本人居住者は少なかったのです。
——ところで、先生のカリフォルニア大学でのご専攻はなんですか。



大正初期のボート部・右から3人目が松井名誉教授

松井　労働経済です。私が留学するころ、日本で三菱、川崎重工のストだとか、労働運動が盛んになりつつあったのです。それで労働問題に関心をもっておりまして、カリフォルニア大学で労働経済を専攻したのですが、当時米国ではウィスコンシン大学のJ・R・コモンズ教授が労働問題の最高の権威でしたから、コモンズ教授のもとで勉強したいという強い希望をもっていたのです。
ちょうどそのころ、パリの平和会議に日本の宗教代表として出席された海老名弾正先生が、帰国途中バークレイへ寄って下さって、「日本へ帰ったら同志社の総長になるのだが、君はここでM.A.をとったら同志社へ帰ってこい」と言われるのです。お勧めに従いたかったのですが、私はもっと深く労働問題を学びたくて、ウィスコンシン大学のコモンズ教授のもとへ参りました。それで昭和三年に日本へ帰ったのです。七年余りのアメリカ生活でした。

有終館の失火事件とその後

——帰国されて、すぐ同志社へ？

松井　昭和三年四月、新学期が始まってから帰ったものですから、「いま空席がない、ちょっと待っていてくれ」と海老名先生にいわれまして、しばらく待機しておりましたら、小川総長秘書が個人的な理由で辞められたので、その年の九月から、海老名総長の秘書として同志社へ勤めることになりました。
——十一月に有終館の失火事件がおこりますね。
松井　総長は九月から広島方面へ伝道に出かけられて、旅先で病気になられ、六カ月ほど広島で入院生活をしておられたのです。私は事務連絡で、京都と広島の間をずいぶん往復しました。
——総長の留守中ですね。問題の火鉢は、有終館のどこに置いてあったんですか。
松井　石段を上った所の、一階の広い部屋です。木製の火鉢を床に直接に置いてあったものだから、加熱して床が焦げてきて、そこから火が燃え広がったわけです。
——石段は明治期には南側についていて、今出川通りのほうから建物へ出入りするようになっていたのを、火災以後にいまのように東側へ移したという人もいますが……。

松井　あの建物は私たちの学生時代には、政治経済部の教室になっていましたが、石段や出入口はもう現在のようになっておりました。

――海老名総長以下、全理事が責任をとって辞任されたんですね。

松井　陛下が御所にご駐輦中だったものだから、そのために警備をしておっての火事だったのですが、責任重大ということで……。

――結果的には、海老名総長だけが辞任されたかたちになったとか。

松井　総長、理事、監事全員が辞任したのです。その後、評議員会で役員選挙をやったところ、他の役員は全部再選され、海老名先生だけが再選されなかったのです。

――理事で財務部長であった西村金三郎氏が、海老名総長と経営方針などがちがっていたので、画策して再選を妨げたという説がありますが……。

松井　さァ、それはどうですか(笑)。海老名総長と西村氏はそりが合わなかったのは事実です。たとえば高商部を岩倉へ移転するについても、西村氏は大沢徳太郎、小林正直といった理事の協力をえて、個人保証で三井信託から金を借りて、計画をどんどん進めて行った。ところが、海老名先生はそれに反対だったですからね。

――ですけどあの移転は、高商部の生徒の総意でもあったわけでしょう、生徒たちが移転のために寄付を集めに奔走するとか。

松井　樹徳館が狭すぎてどうにもならんからということで、その要求は非常に強かったですね。

――そういうことを、海老名先生はどうお考えだったんでしょうか。

松井　あの先生は、ビジネス的な面は詳しくなかったですからね。

――法学部の先生方の中から、西村氏を非難攻撃する人たちが出てきますね。「西村氏は独裁者だ」、「岩倉経営は学園にあるまじき商行為だ」と。海老名先生に対する同情があったからでしょうか。

松井　それはありました、一人だけ再選されなかったものですからね。それもありまして、学生たちの『同志社新聞』に、能勢克男、高橋信司、高橋貞三の三人が、「岩倉土地の経営をやっている理事は醜類だ」と書いたのです。それを読んで大沢徳太郎理事が怒りましてね、三人を総長室へ呼んで、「醜類とは何だ」と、えらい見幕で怒りました。私は秘書だったので隣の部屋で聞いておりましたが……。

――それで三人の先生は、同志社を辞めさせられたんですか。

松井　直接にはそれが原因です。そうとう強く大沢、西村、小林といった理事に対する攻撃をやりましたのでね。

湯浅八郎総長時代

――湯浅八郎総長時代の法学部内の対立は、わたしは海老名総長の辞任問題あたりから、かなりはっきりしていたように思うのですが、松井先生が法学部の先生になられたのは、大工原銀太郎総長（昭和四年十一月就任）の時代ですか。

松井　大工原先生が総長として来られた直後です。最初の間は、私の専攻科目はなかなかもたしてもらえなかったですよ。政治思想史、政治史など政治学科の科目を担当しました。アメリカで Ph. D. のマイナーに政治思想史をやっておったものですからね。経済学科へ移るのは、林要君などが辞めてからです。

――林教授の辞職問題などを、ぜひお聞かせいただきたいのですが。その前に、野村重臣助教授の国体明徴論文掲載不許可の事件がございましたでしょう。昭和十一年二月だと思いますが。

松井　あれは野村君が『同志社論叢』に載せてほしいといって論文を提出したのですが、編集委員をしておった松山斌君が、「自分一人では判断できんから、評議員会にはかって載せるかどうか決めましょう」といって法学部評議員会にはかったのです。評議員会では学術論文としては適当でないというので掲載を拒否した。それを古屋美貞教授が同情して、「載せてやったらいいじゃないか」と言い出したものだから紛糾しちゃってね。話を端折りますけれども、そんなことから法学部内がごたごたするものだから、湯浅八郎総長が「学術及び人物ともに大学教員として不適当だ」というような言葉を使って、野村重臣君を馘首したわけですよ。

――それは湯浅総長独自の判断で。

松井　そうです。あの言葉はまずかったと思いましたね、だから古屋教授が同情したのです。すると湯浅総長は、「大学の行政に干渉した」という理由で、今度は古屋教授を免職処分にしたのです。

――野村助教授は右翼団体と結びついていたという説がありますが。

松井　それは事実です。ただし、それがどの程度であったかは知りませんが、配属将校や右翼団体など外部とのかかわりあいもあったのは確かだと思います。

――そのことが湯浅総長の考え方と合わなかったのでしょう。

松井　湯浅さんという方は、京都大学教授の時代に、例の滝川事件のとき農学部代表の評議員として、滝川氏に同情する票を入れた人で、もともと進歩的なんですよ。だから同志社総長になってからも（昭和十年二月就任）、国体明徴とマルキシズムの思想的対立が生じると、マルキシズム側の立場に立ってしまったのです。

――馘首された側は、対抗措置として、昭和十二年三月に「上申書」を出すことになるわけですね。

松井　そういうことです、「マルキストの首を切れ」というような内容のものです。

――松井先生のお名前は出て参りませんね、どちら側にも。

松井　私はずいぶん執拗に上申組に入れといって、家まで来て強要されました。しかし私と黒川芳蔵教授だけは入らないかったのです。マルキストには同調できないが、他方、国体明徴のような思想にも賛成できなかったのです。それに両派の対立が深まれば、同志社が不利になるだけですからね。

湯浅八郎総長の退陣

――湯浅総長がマルキストというか進歩的な教員に同情的であったというのは、終始一貫してそうだったのですか。

松井　人事については徹底的にそうでした。ああいう理由で解雇するのは例のないことです。

――昭和十一年五月に、湯浅総長の信任が篤かったといわれる林要教授が退職されますね、野村助教授が『林要氏はマルキストである』というガリ版刷りのパンフレットを出したのが、その年の四月で……。

松井　林君をかばっているといわれて湯浅さんに迷惑がかかるからということで、林君は辞職したわけです。

林君は法学部長になったとき、それまでの部長は一年で交替するという不文律を破って二年やったことがあるのです。それは、第一高等学校で親友であった長谷部文雄君が、河上肇にひかれて京都大学に学んだのですが、その長谷部君が同志社の教員になった。そのころ、京大で植民政策を担当していた山本美越乃教授は、同志社の有力な理事でもあって、「長谷部はマルキストだから教授にはしない」と公言していたものですから、長谷部君を教授にするまではという考えから、林君は二年連続して部長をやったのです。それが法学部内の思想的対立の始まりなんです。

——林教授が同志社を去っても対立はますますひどくなって、ついに「上申書」事件にまで発展するわけですが、湯浅総長は中島今朝吾憲兵司令官に仲裁のようなことを頼むでしょう、あれはちょっと意外ですね。

松井　湯浅さんが総長になったとき、同志社創立六十周年の記念事業をやるというので、神戸のＹＭＣＡにいた奥村竜三さんを記念事業部長に呼んできた、その奥村さんが近江兄弟社の吉田悦蔵さんを理事に推薦したのです。たまたま近江兄弟社でも、キリスト教関係とかメンソレータムの広告などでいろいろ問題があって、それを山下彬麿という顧問弁護士の働きで解決したものだから、吉田さんが山下弁護士を湯浅さんに紹介したのです。昭和十二年六月に東京大学の筧克彦教授を呼んできて、日本精神講座を神学館（現クラーク記念館）の二階のチャペルで、一週間にわたってやらせたのはこの人です。

この山下弁護士が中島中将と中学時代の同級生だったものですから、湯浅さんに紹介したわけです。だから吉田悦蔵さんとか山下弁護士は、戦争中の同志社で大きな役割をもったことになるわけです。

——湯浅総長は中島中将に会って、信頼に値する立派な軍人だと思ったそうですね。

松井　おそらくそうであっただろうと思います。軍人としては知性もあるすぐれた人だったようです。

——中島は上申組と被上申組を京都ホテルへ呼んで個別に会い、その後で湯浅総長は両派の教員を処分しますが、半年ばかり後の十二年十二月にご自身も辞職されますね。

松井　そうされる以外に途はなかっただろうと思います。同志社はまことに深刻な状態でした。

太平洋戦争下の同志社

——湯浅総長の後任が牧野虎次先生で、昭和十三年七月に臨時総長事務取扱に、十六年七月に総長に就任されるわけですが、牧野先生はバランス感覚というか、対処の仕方がお上手だったという感じがいたしますね。

松井　同志社がつぶされなかったのは、牧野虎次先生の功績です。あの先生が総長になられてから、同志社は湯浅総長の時代とは全然ちがったものになりました。先生は単なる牧師ではなく、満鉄に勤めていたこともあり、刑務所の教誨師もやられたり、社会を歩いていますから、湯浅先生とは人触りがちがうのです。

——先ほど、松井先生と黒川先生は中立的な立場をとられたというお話がございましたが、牧野総長時代には、そういうお二人の先生が、重要な役割を負われることになるのじゃありませんか。

松井　そうなんですよ。黒川教授が大学長になり、私が学生課長（現在の学生部長）と

いうコンビで、終戦の前までやることになりました。

――学友会が報国団に変りますね（昭和十六年）。

松井　学生も国家のために報ずる組織の一員でなくちゃならんということでした。黒川学長が団長で、私が本部長です。

――本部長の役割はなんですか。

松井　戦時体制になりますと、徴兵猶予はなくなり、徴兵年齢に達した学生はほとんどみな戦地へ行きましたが、残った者は勤労動員で工場や農村へ行ったのです。私は学生の動員先を回って歩かねばなりませんでした。

それから御真影の奉安庫が配属将校の要求でできましたが、その警備責任者が私だった。だから空襲警報が発令されるとすぐに学校へとんで行って、警備に当たらねばならん。そんなことで戦争中は身をすり減すような思いをしました。当時、同志社中学長が野村仁作という退役海軍大佐で、この人はもと艦長だった。軍艦には御真影が下賜されていて、野村さんはその扱い方に慣れているものだから、私たちは「廃艦さん」といっていましたが（笑）、その「廃艦さん」の指示をうけて、言われるとおりにやりました。

戦時下の同志社教員・前列右端が松井名誉教授

デントン女史のこと

――戦時中、同志社にとどまった外国人教員はデントンさんだけですね。昭和十六年十二月八日、太平洋戦争開戦の日に休職を命じられていますが。

松井　デントン女史は日本人以上に日本と同志社を愛された方でしてね、一九二四年に排日移民法が米国議会で制定されたとき、「このような日本人に対する差別的立法はアメリカの恥辱だ、私はこの法律が撤廃されるまでアメリカへは帰らない」と言明されたんですよ。旗行列の後で紙製の日の丸の小旗が落ちていると、国旗は大切にすべきであるといってこれを拾って歩いたり、心から日本を愛していました。

――先生は親しくしておられたんですか。

松井　私が総長秘書をしておったころ、よく昼食に招いて下さいましてね、それ以来のおつきあいでした。デントン女史は女学校のことに限らず同志社全体の情報をもとめられたのです。そうした情報をもとにして、同志社のために寄付を集めてはいろいろな施設をつくるとか、大変貢献されたのです。静和館、ジェームス館、プリンプトン寮、栄光館とその講堂の旧パイプオルガン、岩倉のキング寮、御所の東の布哇寮など、直接間接にデントン女史のご尽力によらなかったものはないと言ってよいでしょう。

戦後になって排日移民法も撤廃され、日本人も他国民と同様に米国へ入国できるようになりましたから、天上のデントンさんも喜んでいると思います。

戦後の日本とアメリカ

——終戦の報をきかれて、どうでしたか。

松井　正直のところほっとしました。（笑）

——戦後ＧＨＱに関係されたようですが。

松井　日本へやってきた労働部の中に、私の恩師コモンズ先生の門弟がいまして、「松井に手伝ってもらおう」ということで、一年半ほど顧問ということで引っぱり出されました。だから月のうち半分は東京、半分は同志社で集中講義という具合でした。

　そのとき驚いたことは、顧問になって二、三日の後に自宅に電話が引けたことです（笑）それはＧＨＱから、顧問に用事がある時に必要だということで、命令したのです。電話は欲しかったのですが、当時は費用もかかるし、申し込みをしてから長いこと待たねばならなかったのに、すぐにやってくれましたねえ。

——労働三法の制定とか、労使関係の改革などに関係されたわけですね。

松井　はい、意見を求められました。それから労働省の設置や労働教育につきましても。

　そういう関係で、昭和二十三年にニューヨークの国際教育協会の招きで渡米しまして、占領下における日本の事情についてあちこちで講演をしました。さらに二十四年にはロックフェラー財団から特別研究員として奨学金をもらいまして、アメリカの大学にできていた労使研究所を回るなど、一年間研究してから帰国しました。

——戦後いち早く、日米両国の架け橋になられたわけですね。帰国されたときには、同志社は新制大学になっていたでしょう。

松井　そうでした。日本を留守にしていたものだから、お手伝いができなくて——。

アラムナイ・ファンドについて

——最後に、先生が最近提唱しておられますアラムナイ・ファンドについてお聞かせ下さいませんか。

松井　アーモスト大学では卒業生が、卒業年度毎に募金委員を選任して、毎年母校へ七、八〇万ドルの寄付をしていますが、これが大学の経常費の一割にも達しています、あいう卒業生の愛校運動ができないものかと思いましてね。私は今年の米寿の記念に、校友会に一千万円を「校友基金」として寄付しました。校友会は、昭和六〇年に創立百周年を迎えますので、その記念事業としてアラムナイ・ファンドすなわち「校友基金」をつくろうではないかということで、その基本金にして頂くためです。この校友基金は当分果実も基金に積立て二、三〇億円になってから、新島先生が理想とした大学の完成のために使用するという構想です。この運動に校友が協力して下さることを切望しています。

——長時間にわたりまして、貴重なお話をおきかせ下さいまして、ありがとうございました。（一九八三年十月三十一日、松井七郎名誉教授宅で収録）

付記

松井七郎先生の過去半生については、先生がこのほど上梓された『松井七郎自叙伝』（第三書館、一九八四年一月刊）に詳しい。

（お詫びと訂正）

前号「新島得夫氏に聞く」の中で、次の思いちがいがありましたのでお詫びを兼ね訂正いたします。

（誤）上野英二郎→（正）上野栄三郎

なお、同志社墓地の広津の墓は、友信の墓ではないと思われます。